

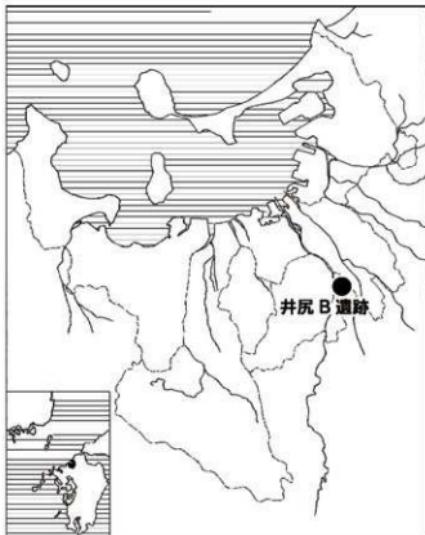
い じり  
井 尻 B 遺 跡 22

－第36次調査の報告－

2014  
福岡市教育委員会

# い じり 井 尻 B 遺 跡 22

－第36次調査の報告－



遺跡略号 IGB-36

調査番号 1112

2014  
福岡市教育委員会



# 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります。開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書で報告する井尻B遺跡は、福岡平野中央部の中位段丘上に立地する遺跡で、これまでの発掘調査等によって、旧石器から中世の集落址や古墳がみつかっており、福岡平野の重要な遺跡の一つと考えられております。

本書で報告する第36次調査地点は遺跡の北西部に位置しますが、弥生時代から古墳時代前期の大規模な溝の一部などがみつかっており、遺跡の具体的な歴史的変遷を明らかにする資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけすることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例 言

1. 本書は南区井尻1丁目728-2敷地内の専用住宅建設工事に先立って福岡市教育委員会が実施した井尻B遺跡第36次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構の実測と写真撮影、遺物実測は担当者が行い、製図は熊谷御堂和香子（技能員）が行った。
3. 土壌の科学的分析（花粉分析）と報告（第III-3章）を株式会社古環境研究所に委託した。
4. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。
5. 遺構の略号は、溝をSD、柱穴をSP、その他をSXとしている。
6. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は平成26年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

井尻B遺跡第36次調査		遺跡調査番号	1112
地番	福岡市南区井尻1丁目728-2	遺跡略号	IGB-36
分布地図番号	O24 板付	調査面積	175 m <sup>2</sup>
調査期間	2011(平成23)年7月1日～8月19日		

# 本文 目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 第36次調査の報告	3
1. 調査の概要	3
2. 調査の記録	3
1) 遺構	3
2) 出土遺物	8
3. 井戸B遺跡第36次調査における花粉分析	17
4.まとめ	24

## 挿図目次

Fig. 1 井戸B遺跡周辺 (1/40000)	2
Fig. 2 井戸B遺跡 (1/7500)	3
Fig. 3 第36次調査地点周辺 (1/400)	4
Fig. 4 第36次調査区全体図 (1/100)	5
Fig. 5 SX007 矢測図 (1/40)	6
Fig. 6 SD002 土層実測図 (1/40)	6
Fig. 7 基本土層、SD001・005周辺土層実測図 (1/60)	7
Fig. 8 SD001 出土土器実測図 1 (1/3)	9
Fig. 9 SD001 出土土器実測図 2 (1/3)	10
Fig. 10 SD001 出土土器実測図 3 (1/3)	11
Fig. 11 SD001 出土土器実測図 4 (1/3)	12
Fig. 12 SD001、SD005 出土土器実測図 (1/3)	13
Fig. 13 土製品、石製品実測図 (1/2)	14

## 図版目次

PL. 1 1. I区全景 (SD001 上層剥削段階 北から)	25
2. I区 SD001周辺 (南から)	25
PL. 2 1. I区 SD001 南塙土層断面	26
2. I区 SD005 (北から)	26
PL. 3 1. II区作業風景 (南から)	27
2. II区全景 (南から)	27
PL. 4 1. II区 SD002 (南から)	28
2. III区全景 (SD001 上層剥削段階 南から)	28
PL. 5 1. III区全景 (北から)	29
2. III区 SD001 (南から)	29
PL. 6 出土遺物	30

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2010（平成 22）年 11 月 10 日付けで個人事業者より福岡市教育委員会宛に、南区井尻 1 丁目 728-2（敷地面積 319.93 m<sup>2</sup>）における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会がなされた（事前審査番号 22-2-785）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻 B 遺跡内であり、2010 年 12 月 21 日に埋蔵文化財第 1 課事前審査係で試掘調査したところ CL-100 cm 以下の深さで 17 次調査 F 区検出溝の延長等の遺構や遺物の存在が確認された。この成果をもとに協議を進めたが、建設工事にあたっては地盤改良工事等が必要で遺構の破壊を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査対象は建設工事範囲の 187.73 m<sup>2</sup> で、実際の調査面積は 175 m<sup>2</sup> である。調査・整理費用には国庫補助金が適用された。2011 年の 7 月 1 日から 8 月 19 日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成 25 年度に行った。

## 2. 調査の組織

調査委託 個人事業者

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

平成 23 年度

調査総括 文化財部長 藤尾浩

文化財部埋蔵文化財第 2 課課長 田中壽夫

埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係長 香波正人

庶務担当 埋蔵文化財第 1 課 管理係 井上幸江

事前協議 埋蔵文化財第 1 課事前審査係長 宮井善朗

事前審査係 木下博文

調査担当 埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係 森本幹彦

なお文化財部は組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管しており、整理・報告を実施した平成 25 年度の調査の組織は以下の通りとなっている。

調査総括 文化財部長 西島裕二

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課調査第 2 係長 榎本義嗣

庶務担当 埋蔵文化財審査課 管理係 横山忍

報告担当 埋蔵文化財審査課 事前審査係 森本幹彦

## II. 位置と環境

井戸 B 遺跡群は福岡平野の那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する。

この台地は阿蘇山の火砕流の二次的堆積物からなる中位段丘で、春日丘陵から北方に井尻、五十川、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵と順続的に分布しており、それぞれに遺跡が立地している。

弥生時代から古墳時代では、板付遺跡、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などが福岡平野の代表的な遺跡として知られるが、井原B遺跡はそれらの中間的な位置にある。

遺跡は南北900m、東西400mほどの範囲で、中央に「井戸廃寺」の推定域がある。

平成25年まで40次の調査が行われている。遺跡北部の御供所・井尻線(都市計画道路)の発掘調査や、遺跡南部の西鉄井尻駅より南に伸びる通り沿いにおける共同住宅や店舗建設に伴う発掘調査が多く、それらのエリアでは比較的詳細に遺跡の内容が明らかになってきている。

旧石器時代～中世の遺跡がみつかっているが、旧石器時代の包含層、弥生時代中期の豪棺墓群、弥生時代中期～古墳時代前期の集落（特に弥生後期から古墳時代前期前半にピークがあり、青銅器生産関係遺物や外来系土器等も一定量出土）、弥生時代終末期の区画墳丘墓、古墳時代中期の古墳群（家形埴輪等が出土）、飛鳥時代から奈良時代の官衙・守院関連造構（「守」刻書土器、「山部評 豊評」刻書瓦等出土）などが、これまでの発掘調査における主要な成果となっている。

本書で報告する第36次調査地点は遺跡の北部に位置するが、周辺は御供所・井尻線の調査(第17次調査)等で近年、大規模に発掘調査が行われているエリアである(Fig.3・4)。本調査地点や17次調査F区では弥生時代後期から古墳時代前期の大溝がみつかっており、17次E区以南では当該期の堅穴建物や掘立柱建物ほか集落関連遺構がみつかっている。



Fig.1 井戸 B 遺跡周辺 (1/40000)

### III. 第36次調査の報告

#### 1. 調査の概要

本調査地点は井戸B遺跡の北西縁辺部である。宅地盛土と旧水田耕作土「ド、GL-90~100cm」前後で遺構面となる。遺構面は調査区東部が鳥栖ローム、西部はその上層の黒ボク土である。標高は10.9~11.1m前後で東京から西、南から北に向かってゆるやかに低くなる地形である。

検出した遺構は弥生時代から古墳時代の溝3条以上である。幅6m、深さ1.5m前後の大きめの大溝があり、17次F区SD2005等の延長とみられる。

調査グリッドは敷地の形状に合わせて任意の方向で設定したが、国土座標に近似している。敷地内で廃土を処理する必要があり、対象地を南北から3区に分けて調査を行ったが、対象地の大部分を大溝が占めるため、十分な廃土置き場を確保するのが困難であった。安全を確保するためにも、大溝の半分近くは下層の砂層検出面で掘削を停止している。

出土遺物はコンテナケース約20箱である。弥生時代から古墳時代の土器が主体である。他には鉄型内型の可能性がある土製品、磁石、黒曜石剥片などが出土している。

#### 2. 調査の記録

##### 1) 遺構 (Fig.4~7)

###### ① SD001

箱掘りで幅6m、深さ1.5m前後を測る南北方向の溝で、南北長12.3mを検出した。土層断面や掘り方から少なくとも1回は再掘削がなされている。

SD001西側はCライン周辺で段があり、Fig7-Cの8~23層については再掘削後の堆積と



Fig.2 井戸B遺跡 (1/7500)

みられる。24・25層の灰色粘質土層はこれに切られているとみることができよう。Bラインの3～24層、Aラインの6～16層がこれに対応するとみられる。当初のものをSD001a、再掘削後をSD001bとする。

また、Bライン周辺のSD001東部ではSD001bに切られる溝も確認できる(30、31層)。SD001cとしたい。SD001aとの前後関係は不明確であるが、Aラインでその断面が確認できないので、SD001aより古いとみられる。SD001cの東壁はSD001a、bのそれとほぼ重複しており、SD001cの下層のみが埋没した段階でSD001a、bが掘削されたものとみるこ

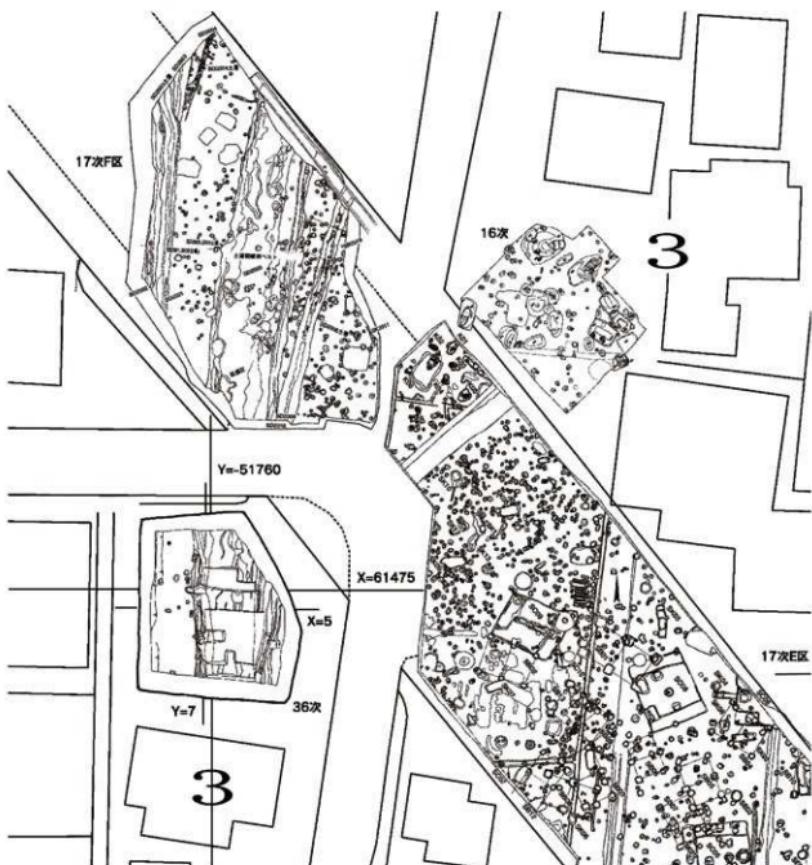


Fig.3 第36次調査地点周辺 (1/400)

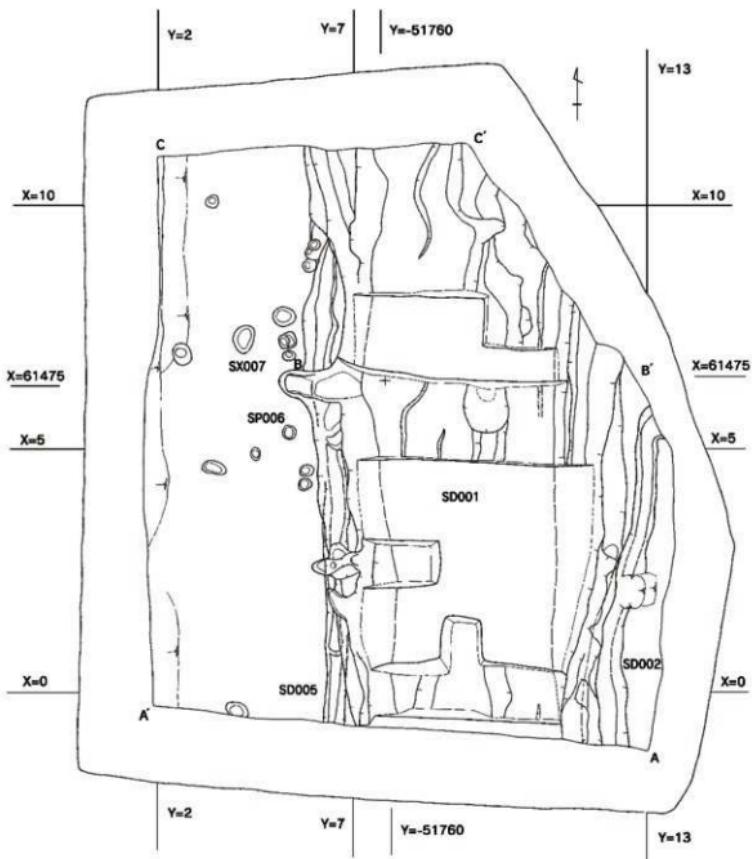


Fig.4 第36次調査区全体図 (1/100)

とができる。

SD001 の西肩には溝に直交する方向の掘り込みがあるが<sup>5</sup> (SX007 等、Fig.5)、水口のようなものなのか、その性格については不明確である。

調査時に「SD001 上層」としたものは暗褐色シルト主体の堆積層で、滞水状態の自然堆積とみられる。SD001b の上～中層に対応する。SD001 下層は粗砂層を主体とする堆積で流水機能時の自然堆積とみられる。SD001 b の下層と SD001 a の堆積に対応するが、灰色粘質土層の堆積状況 (A ラインの 15・16 層、B ラインの 20・21・23・24 層、C ラインの 24・25 層) で SD001a と b の線引きができる。

下層の砂層まで掘削すると、常時湧水がある状況で、SD001a の掘り方は八女粘土層に達している。水源として西側の旧河道か溜め井のようなものがあったのか定かではないが、湧水も多く、水量豊富な水路として機能していたものとみられる。

SD001a 溝底の標高は A ライン 9.5～9.8m、B ライン 9.4～9.7m である。C ラインは 9.6m 以下であるが、東側調査区外で、一段深くなるとみられる。SD001b は A ライン 10.1～10.2m、B ライン 9.9～10.1m、C ライン 10.2m である。溝底の両壁寄りが中央より深くなる。SD001a の溝底は北に向かって 10m 毎 14cm 前後低くなっていく計算になるが<sup>5</sup>、SD001b はほとんど傾斜がないようである。

SD001c は断面 U 字形で、溝底は標高 10.2m 前後で、SD005 よりは 30cm 深いが<sup>5</sup>、同時期に並列する溝として機能していた可能性はある。覆土は黒灰色粘質土の下層に薄い砂層の堆積がある。

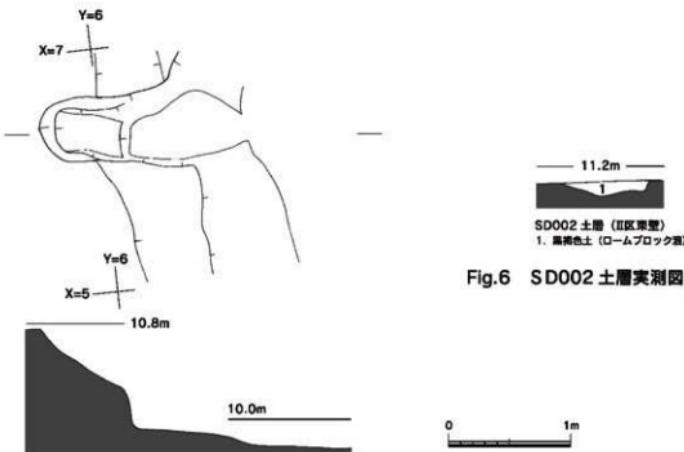


Fig.6 SD002 土層実測図 (1/40)

Fig.5 SX007 実測図 (1/40)

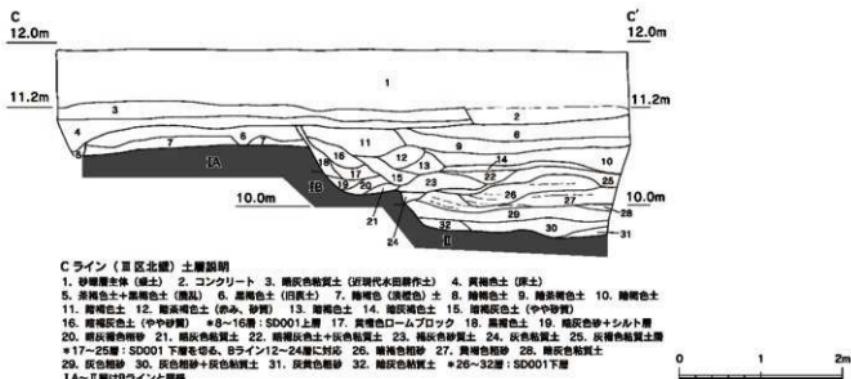
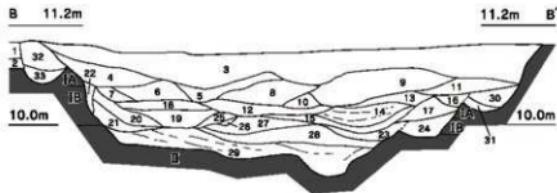
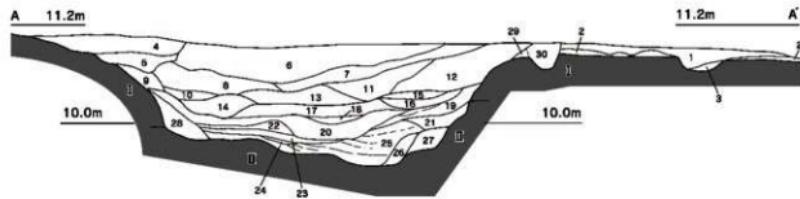


Fig.7 基本土層・SD001・005周辺土層実測図 (1/60)

## ②SD002

SD001 の東側を切る南北方向の溝で、幅 50 ~ 90cm、深さ 15 ~ 40cm 前後的小溝である。北側の調査区壁面近くで東に屈曲している。(Fig.6) 溝底は北側が高く、標高 10.95m、南側が 10.6m となる。覆土は黒褐色土や黒みのある暗褐色シルトが主体である (Fig.7 の A ライン 4・5 層)。

## ③SD005

SD001 の西側と重複する南北方向の溝で、SD005 が先行する。SD001 c と同時期に並列していた可能性がある。幅 50cm 前後、深さ 30 ~ 50cm の小溝である。覆土は黒褐色シルトを主体とする。

## 2) 出土遺物 (Fig.8 ~ 13)

SD001 出土の弥生土器・土師器が出土遺物の主体をなす。

Fig.8 ~ 9 は SD001 上層出土土器。

1 は近畿系の直口広口壺。底部は丸底で、古墳時代初頭である。胴部外面は縦ハケ主体、内面ケズリの上端は巾位よりやや上で、肩付近はハケと粘土縫目を残す。「V 様式」系。II 区上層下位～下層上部出土である<sup>a</sup>、西側の遺構面から出土した破片とも接合。

2 は西新式系の壺で、口縁を欠く複合口縁であったろう。底部は丸底で古墳時代初頭。胴部外面上位に横 S 字状のヘラ描記文がある。焼成破裂痕あり。II 区上層出土、取り上げ番号 R3。

3 は西新式系小型直口壺。弥生終末後半から古墳時代初頭頃。II 区上層下部出土。

4 は弥生後期の複合口縁壺。II 区上層下部出土。5 は鋤先口縁壺の系譜を引く大型壺で糸島系か。口縁端面に列点文を施すが、遺存不良。III 区上層下部出土。6 は古墳時代初頭の複合口縁壺と判断したが、弥生後期の高杯の可能性もある。7 はく字口縁鉢。弥生後期前半。III 区上層下部出土。8 は甕の脚台とみられる。二次的被熱や煤化を経ている。II 区上層下部出土。9 は西新式系の器台で、弥生終末から古墳前期。I 区上層出土。

Fig.9-1 は西新式系の大型甕(蓋棺サイズ)。古墳初頭か。III 区上層下部～下層上部出土。2 は大型壺の頸部で外面に丹塗り痕跡がある。弥生時代中期後半から後期初頭か。3 ~ 7 は III 区上層下部出土の土器底部である。3 は弥生後期初頭の大型甕、4 は後期前半の壺、5 は弥生終末期の大型甕、6 は同時期の甕、7 は同時期の鉢である。8 は II 区上層下部出土で、古墳時代初頭の大型甕である。

9 は近畿 V 様式系の甕である。小さい不安定な平底で古墳初頭前後の型式である。胴部は右上主体の平行タタキで、下部はタテハケによってタタキ目を消している。内面は胴下部が簾状ハケメ等、上部はナデである。頸部周辺にハケメを残し、口縁部付近の調整はケズリに近い。胴下部の内外面にみられる粘土縫目は成形の単位を示す。赤褐色の色調で角閃石、雲母を多く含むが、在地の胎土の範疇に入る。煮沸等の使用痕がほとんどみられない。I 区の下層上面出土、取り上げ番号 R1。

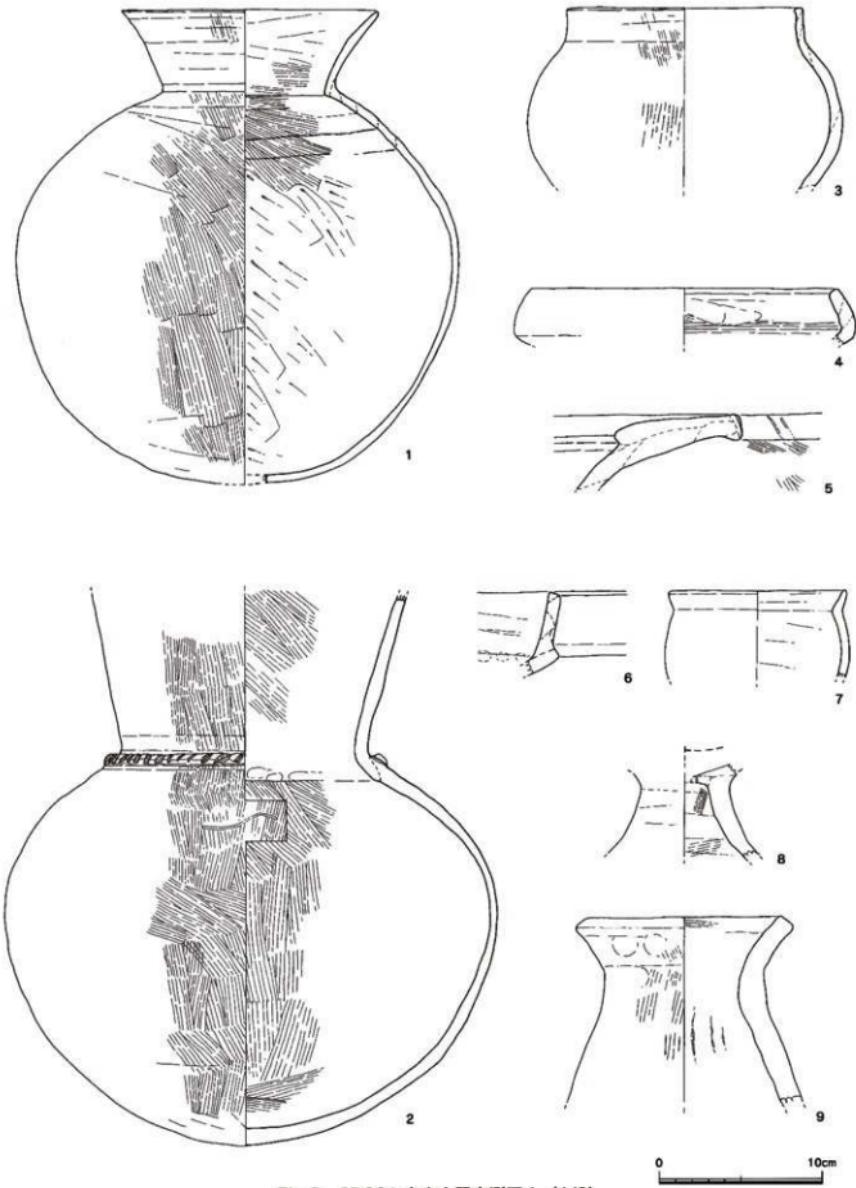


Fig.8 SD001 出土土器実測図 1 (1/3)

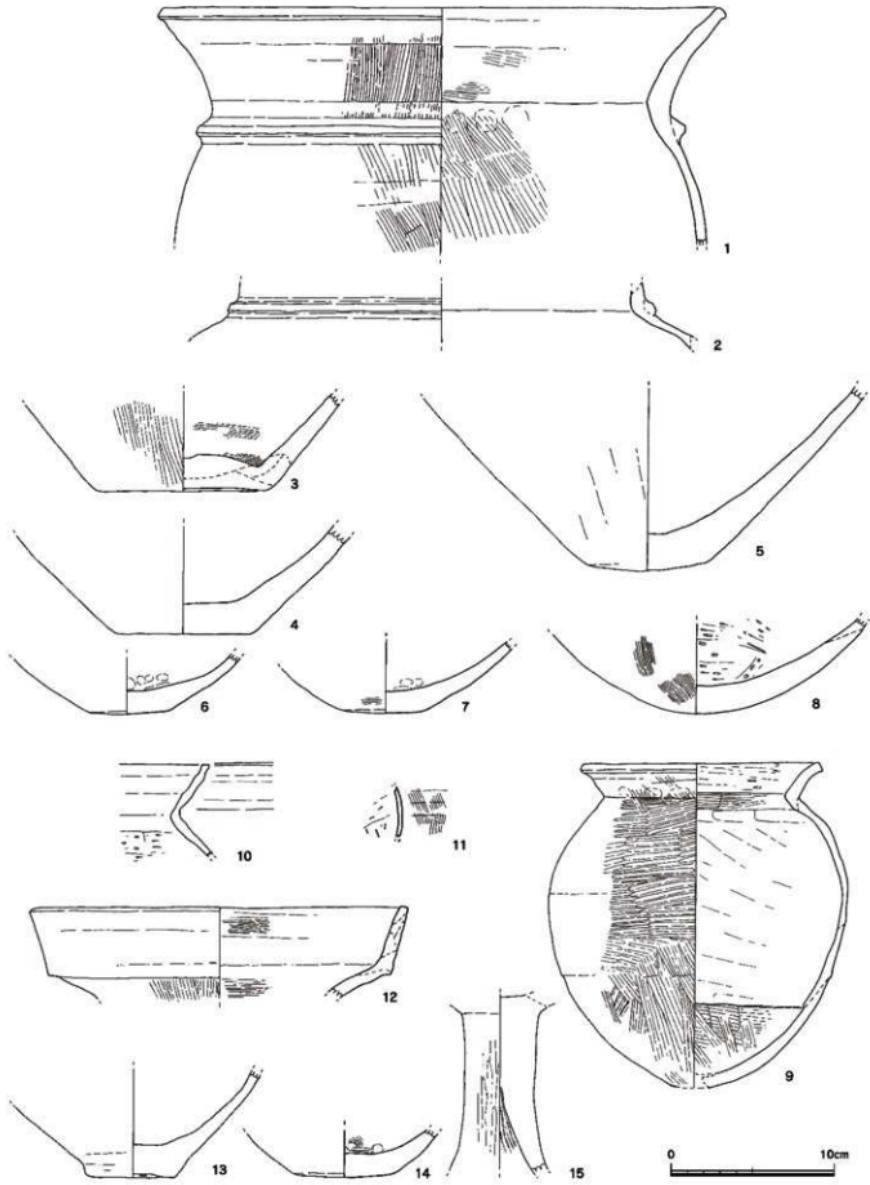


Fig.9 SD001 出土土器実測図 2 (1/3)

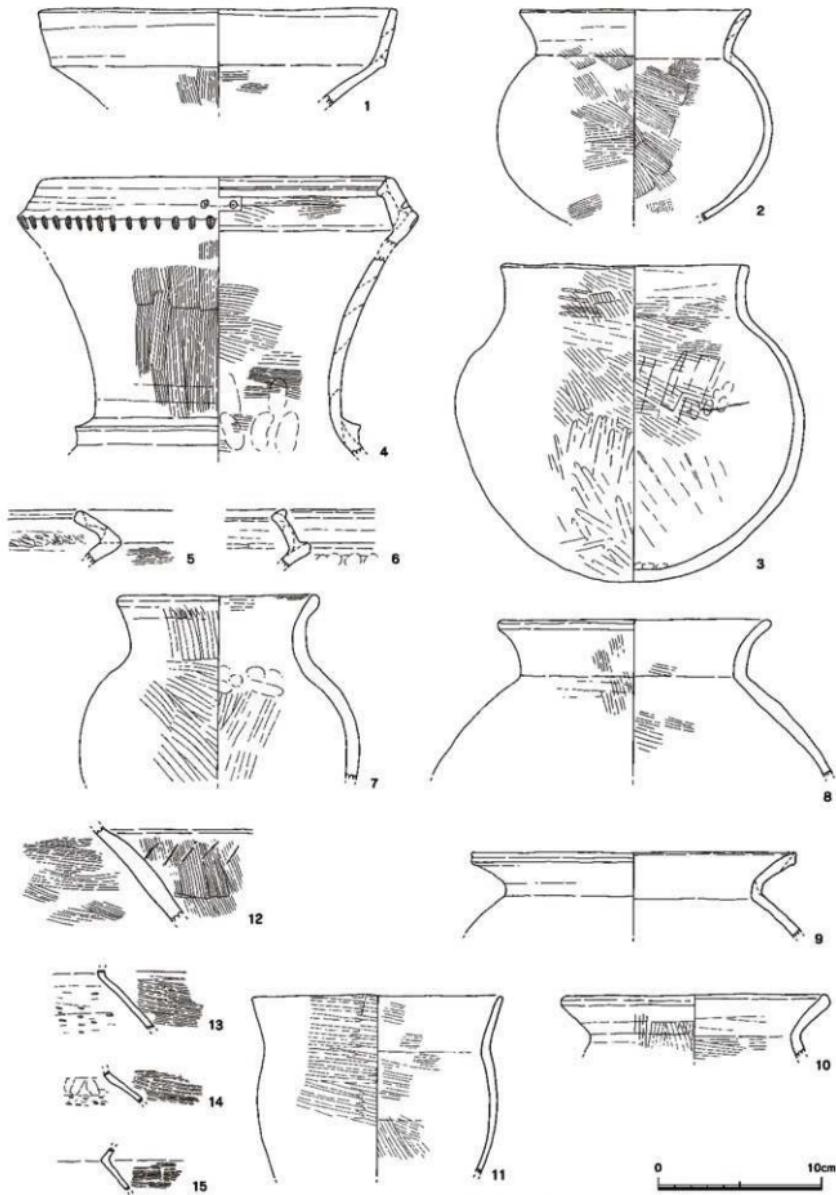


Fig.10 SD001 出土土器実測図 3 (1/3)

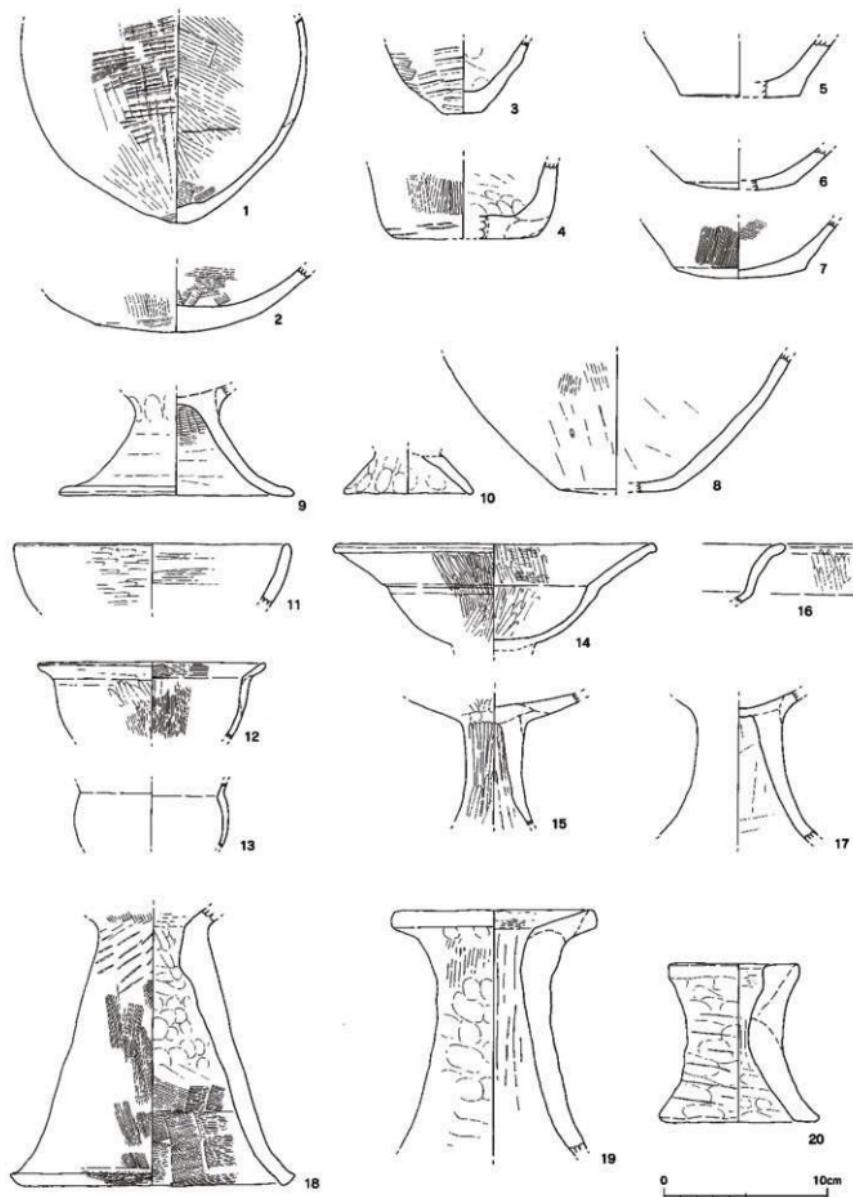


Fig.11 SD001 出土土器実測図 4 (1/3)

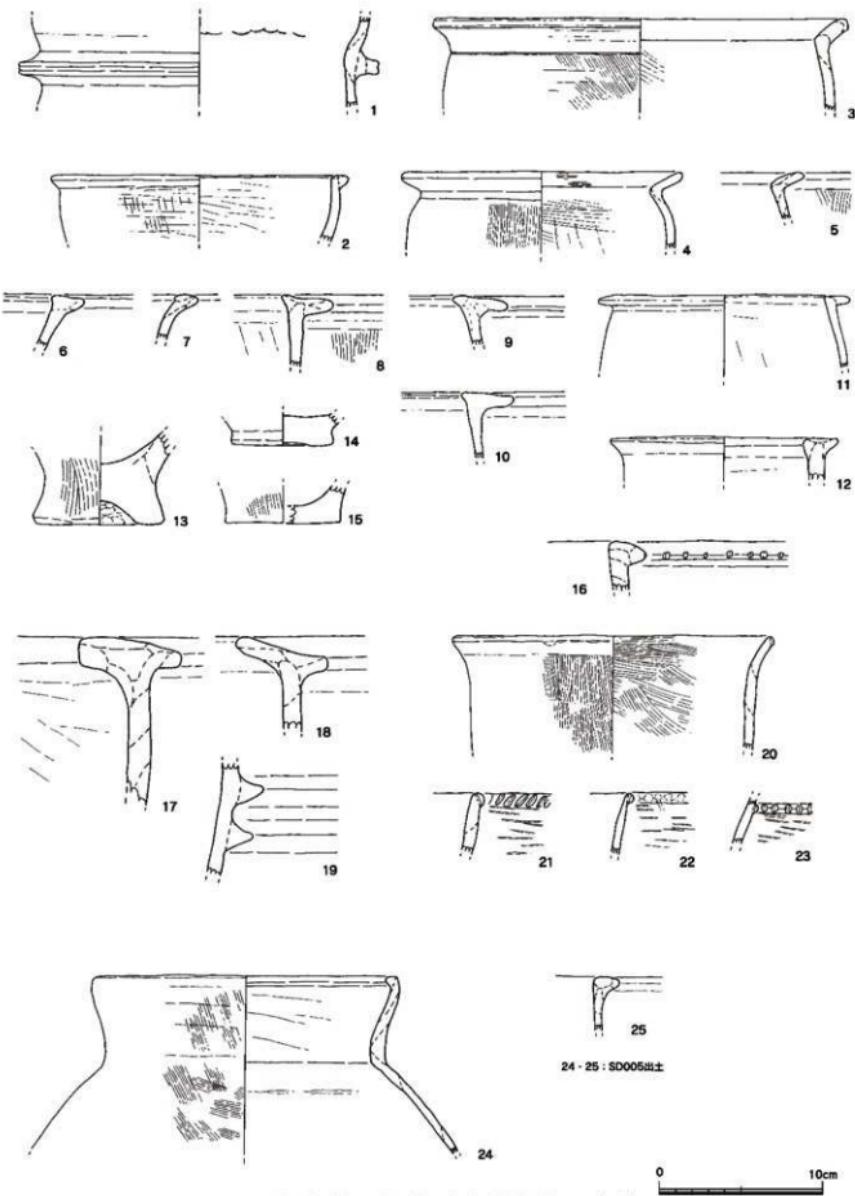


Fig.12 SD001、SD005 出土土器実測図 5 (1/3)

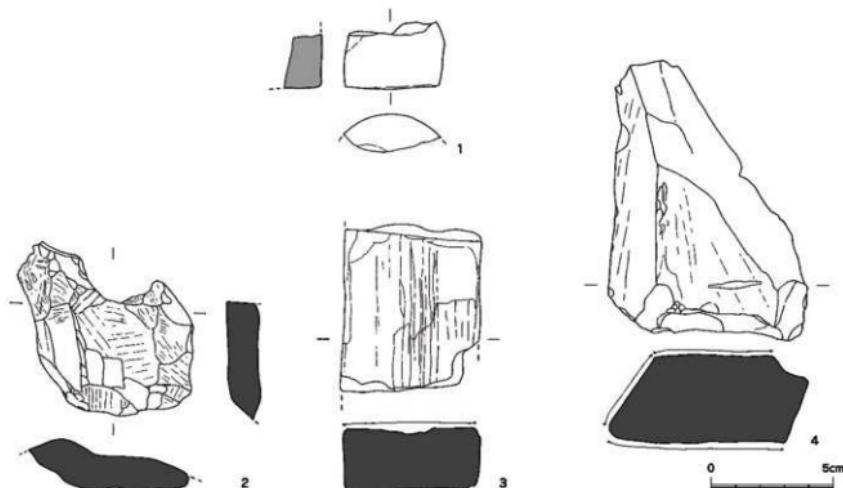


Fig.13 土製品、石製品実測図 (1/2)

10、11はI区上層下部出土の布留式系壺の小片である。前者は口頸部の形態から古墳前期前半とみられる。後者は胴部片で傾き等不明である。

12は在地系の複合口縁壺で、近畿系二重口縁壺の影響を受けた古墳前期のものであろう。I区上層下部出土。13・14はI区上層下部出土壺底部である。前者は弥生中期末～後期初頭、後者は後期後半である。15は高杯脚部で上部は中実である。古墳初頭前後の近畿V様式系の影響を受けたものか。I区上層下部出土。

Fig.10～11はSD001下層出土土器である。

1はFig.9-12と同様の複合口縁壺。I区出土。2は古墳初頭前後の西新式系小型直口広口壺。赤褐色で砂粒の少ない比較的精良な胎土である。II区下層上位出土。

3も古墳時代初頭前後の西新式系小型壺である。外面はハケメ主体であるが、胴下半はミガキで、口頸部にタタキ痕跡がある。内面は下半がケズリ状のナデ、上半以上がハケメ主体で、口縁部付近は横ナデで消す。胴中位に粘土継目があり、器面調整の変換点もその辺りにあるので、成形の単位を示すものであろう。III区東部出土。

4は複合口縁壺で、口頸部の後線に板状工具小口（ハケメ工具）を押し当てた列点文、口縁中ほどに貫通しない穿孔がある。弥生終末期。III区下層中位～下位出土。5は後期の複合口縁壺で、II区下層下位出土。6は終末期の複合口縁壺で壺前系か。弥生終末期とみられる。I区下層出土。

7は後期の広口直口壺である。III区最下層出土、取り上げ番号R4。

8は後期から終末期の広口壺でⅢ区下層中位出土。9は後期の壺でⅡ区下層下位出土。10は終末期前後の小型壺で跳ね上げ気味の口縁である。Ⅱ区下層上位出土。11は古墳初頭前後の西新式系小型壺でⅠ区下層上位出土。12は壺の肩部で外側に貝殻散縁の列点文がある。調整、胎土等から後期～終末期の在地のものとみられる。Ⅰ区出土。

13～15はⅢ区下層上～中位出土の圧内壺である。いずれも頸部付近の小片である。13・14は外側やや太筋の左上タタキ、頸部内面にシャープな稜線はなく、ケズリの上端が頸部より少し下り、淡褐色（白み）の色調を呈する「筑前型」である。15は外側やや細筋のタタキで頸部内面に稜線があり、赤褐色を呈する。河内型の影響を受けたものか。

Fig.11-1は近畿V様式系壺の胴部である。小さい不安定な平底で古墳初頭前後の型式である。外側右上主体のタタキで、下半を中心にカキナデが施され、内面はハケメ主体である。淡赤褐色を呈し、使用痕はほとんどみられない。Ⅲ区下層上位出土。

2は終末期後半の壺底部である。内面の一部に縦状ハケメがみられる。3は平底の鉢または小型壺で、弥生後期のものとみられる。Ⅲ区下層中位出土。4は後期前半の壺また鉢底部で、Ⅰ区南出土。5・6はⅠ区出土の壺底部で前者は後期前半、後者は終末期である。7はⅡ区下層上位出土の壺底部で後期末か。8はⅢ区下層下位出土の壺底部で終末期である。外側下半はカキナデである。9は脚台であるが、壺・鉢か壺のものか不明。Ⅲ区出土。10は手捏ねの脚台である。壺塙土器の可能性がある。橙褐色を呈するが、二次被熱かどうかは不明。Ⅱ区下層下位出土。11は後期の直口鉢でⅢ区出土。12はく字口縁鉢でⅢ区出土。13は古墳初頭の小型丸底壺であるが、砂粒を多く含む胎土である。調整は不明。Ⅰ区西出土。14は小型の高杯で西新式系をベースとするが、近畿系の影響を受けている可能性がある。古墳初頭とみられる。Ⅲ区下層中位出土。15は西新式系高杯脚部でⅢ区下層中位出土。16は後期後半の高杯で、Ⅰ区出土。17は後期前半の高杯脚部でⅡ区下層上位出土。18～20は後期の器台・支脚である。18はⅡ区下層上位、19はⅢ区、20はⅢ区下層中位出土。

Fig.12の1～23はSD001出土の弥生中期以前の土器で混入とみられる。

1は瓢形壺の結合部付近で外側丹塗。同一個体とみられる鶴先口縁や頸部片もある。中期後半。Ⅰ～Ⅱ区上層出土。2は中期初頭の鉢でⅡ区下層下位出土。3は中期前半の屈曲口縁壺で、Ⅰ区出土。外側下の沈線状はナデ工具の端が深く入ったものであろう。4は中期後半の屈曲口縁小型壺でⅠ区南最下層出土。5は中期の屈曲口縁壺で、Ⅰ区下層出土。6、7は中期初頭の壺である。後者は口径18cm前後とみられる。前者はⅢ区SD001出土、後者はⅠ区西の造構面出土である。8は中期前半の鶴先口縁壺で、Ⅰ区南最下層出土。9・10は中期前半～中葉の鶴先口縁壺で、前者はⅢ区東部下層、後者はⅢ区下層下位出土である。11は中期前半の鶴先口縁小型壺でⅡ区下層上位出土。12は中期初頭の小型壺で、Ⅲ区下層下位出土。13は中期前半の上げ底の壺底部でⅠ区出土。14は中期中葉の壺底部でⅢ区南出土。15は中期後半の壺または壺の底部で、Ⅰ区出土。16は前期末の亀ノ甲式系壺口縁でやや大型品とみられる。Ⅲ区上層下位出土。17～19は壺棺片である。17・18は中期前半の汲田式で、Ⅰ区出土。19は中期後半の胴部でⅢ区下層出土である。20は弥生前期の如意形口縁壺でⅠ区南最下層出土。21～23は弥生前期の刻目突帯文深鉢でⅠ区南最下層などから出土している。

Fig.12 の 24・25 は SD005 山土土器である。24 は弥生後期の直口広口壺で、口縁端部が内面に肥厚する。直立気味の短い頸部に口縁付近はやや袋状をなし、肩はあまり張らない。下層山土、取り上げ番号 R2。25 は混入の弥生中期初頭の壺である。

Fig.13 の 1 は土製品である。外側面は R2.75cm の弧をなす。雀居 4 次 C6 区包含層 8 層出土品 (406 箇・Fig.133-1293) のような断面杏仁形となるのではなかろうか。赤褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。小銅鋒等の内型である可能性がある。

Fig.13 の 2 ~ 4 は石製品である。2 は滑石加工品であるが、用途不明。未成品であろうか。図中央上端のカーブは側面が研磨されており、いきている。Ⅲ区上層下位出土。3 は柱化木製の砥石か。Ⅰ区西の遺構面出土。4 は頁岩製の砥石で、Ⅲ区 SD001 上層下位出土。

### 遺構の時期について

36 次調査地点で検出した遺構で最も古いとみられるのが、SD005 で、出土した Fig.12-24 の壺より弥生後期であるが、下半部が遺存しておらず、細別時期は明確でない。SD001c もこれに近い時期とみられる。

SD001 は下層下部から弥生後期後半～終末期の土器が出土しており（遺存の良いのは Fig.10-4、7 等）、また、SD005 に後出することから、SD001 a の掘削時期は弥生後期後半以降の可能性が高いと考えられる。SD001 から出土する弥生前期から中期の土器は小片が多く、大溝掘削時に先行遺構や近接集落域から混入したものであろう。

SD001b については調査時に a の土器と b の土器を厳密に分別できていないという問題があるが、下層上位～上層下部の土器群に SD001b 掘削時期を示すものが含まれると考えられる。Fig.8-1(近畿系直口広口壺)、8-2・3、10-2・3 (在地系壺)、9-1 (在地系大型壺)、9-9、11-1 (近畿V様式系壺) など、今回出土土器の中で遺存の良好な個体はおおむねこの層位からの出土であり、SD001b の掘削から埋没開始時期を示す土器群と考えられる。その時期は古墳時代初頭（久住氏の II A 期段階）前後である。Fig.10-13 ~ 15 の庄内壺も小片ながらこの層位での出土であり、SD001b の時期を示唆する。古墳時代前期前半以降の土器は多くない。布留式系土器も Fig.9-10・11 等小片が少量出土するのみである。古墳時代前期前半には概ね埋没しているとみられる。

SD002 は SD001 を切る溝である。出土遺物は小片ばかりで、遺構の時期を決め難い。調査区内の遺構検出面で古代とみられる須恵器壺片が出土しており、その時期と考えておきたい。

# 井戸B遺跡第36次調査における花粉分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

井戸B遺跡第36次調査において花粉分析（寄生虫卵分析を含む）を行い、植生・環境・農耕の復原を行った。花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

## 2. 試料およびその性状

### (1) 試料

分析試料は、井戸B遺跡第36次調査II区北壁SD001から採取された以下に示す3点である。試料採取箇所は分析結果の模式層序図に示す。

試料① II区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

試料② II区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

試料③ II区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

### (2) 性状・材質

試料の粒度組成、有機物含有量を図1に示す。試料①は砂が主となるが淘汰は悪く、シルト・粘土もやや多い。試料②も同様に砂が主となるが淘汰は悪く、シルト・粘土もやや多い。試料①・試料②は淘汰が悪いため水流の影響を受けずに堆積したとみなされ、シルト・粘土がやや多いことから周囲からの土壤堆積物が堆積したとみなされる。試料③は粗粒砂にピークをもち、粗粒に偏る。シルト・粘土も含まれ、堆積後に風化や土壤生成作用による分解を受けたと考えられる。有機物含有量は試料①・試料②・試料③とも2%以下と極めて低い。微細植物遺体片では、暗褐色化した微細木片がやや多く、微細炭片は少なく、微細草本片は検出されない。微細木片は土壤生成作用なしし風化による分解で生成され、強く受けとると草本片は分解する。以上から、試料①・試料②は周囲の土壤が堆積したか、堆積後に乾燥化し、土壤生成作用なしし風化による分解を受け、草本片や花粉粒は分解されたとみなされる。試料③は水流による淘汰を受け粗粒砂を中心とするが、堆積後に土壤生成作用や風化を受けたと推定される。

## 3. 方法

花粉粒・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、リン酸三ナトリウム法を加え、以下の手順で行った。

- 1) 試料から  $1\text{ cm}^3$  を採用
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酛酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1）のエルドマ

ン氏液を加え1分間湯煎) を施す

6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

8) 檢鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参考して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## 4. 結果

### (1) 分類群

分析の結果、井戸B遺跡第36次調査II区北壁SD001の試料(堆積物)は、いずれも花粉密度が極めて低く、分離できない微細木片が多い。出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉7、シダ植物胞子2形態の計15である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、計数できた試料については傾向をみるために密度を図示した。主要な分類群は顯微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

スギ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、ハイノキ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

#### 〔草本花粉〕

イネ科、ソバ属、アブラナ科、チドメグサ亞科、タンポポ亞科、キク亞科、ヨモギ属

#### 〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

### (2) 花粉群集の特徴

下位より花粉群集の特徴を記す。

#### 1) 試料③ II区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されなかった。わずかに樹木花粉と草本花粉を含むクワ科—イラクサ科、草本花粉のイネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属が認められた。

#### 2) 試料② II区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

花粉密度は低い。草本花粉のイネ科、ヨモギ属がやや多く、アブラナ科、タンポポ亜科が出現し、樹木花粉ではクリが出現する。

#### 3) 試料① II区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

花粉密度は低い。草本花粉のヨモギ属が最も多く、アブラナ科、イネ科、ソバ属、樹木花粉ではクリ、スギが出現する。

## 5. 推定される植生、環境、農耕

各試料とも花粉密度は低かったが、花粉生産量が極めて少なく散布性の低い虫媒花植物の花粉が検出されたことから、植生の復原を試みた。以下、下位より植生、環境、農耕の推定復原を行う。

### 1) 試料③ II 区北壁SD001下層暗灰色粗砂、シルト混：弥生終末期前後

花粉はほとんど検出されず、水流の淘汰を受けた粗粒堆積物であり、花粉等の比重の軽い粒子は淘汰されほとんど堆積されなかつたとみなされる。微細木片がやや多く、堆積後に土壤生成作用ないし風化を受けたと推定される。わずかに検出されたクワ科—イクラサ科、イネ科、アブラナ科、タンボボア科、キクア科、ヨモギ属は乾燥を好む草本がほとんどで、周囲はこれら乾燥を好む草本が分布し、乾燥した環境であった。

### 2) 試料② II 区北壁SD001上層黒褐色土：古墳時代前期前半

イネ科、ヨモギ属がやや多く、アブラナ科、タンボボア科が出現することから、周囲にはこれらの草本が分布し、乾燥した環境が示唆される。イネ科とアブラナ科には雑穀や野菜が含まれ、これらが栽培された可能性がある。樹木では虫媒花植物のクリが検出され、近隣に分布していた。

### 3) 試料① II 区北壁SD001上層茶褐色土：古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む

周囲にはヨモギ属が多く分布し、乾燥した環境が示唆される。アブラナ科、イネ科、ソバ属が生育していた。アブラナ科とイネ科には栽培植物が含まれ、ソバ属は明かな栽培植物であることから、周囲にソバ属の畑が分布し、アブラナ科植物、雑穀の栽培が行われていた可能性が示唆される。樹木では風媒花植物で乾燥を好む二次林種のクリが分布していた。

## 6. まとめ

井戸B造跡第36次調査II区北壁SD001で花粉分析を行った結果、下位より弥生終末期前後（試料③下層暗灰色粗砂）の時期は、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科、タンボボア科、キクア科の草本が周辺に分布し乾燥した環境が推定された。古墳時代前期前半（試料②上層黒褐色土）では、周囲にヨモギ属とイネ科が多く分布し乾燥した環境が示唆され、雑穀やアブラナ科植物の栽培の可能性が推定された。古墳時代前期前半主体で古代までの遺物を含む時期（試料①上層茶褐色土）では、ソバ属が検出され、周囲に畑の分布が示唆され、他にアブラナ科植物、雑穀の栽培の可能性が示唆された。周囲には乾燥を好み二次林種であるクリも生育していた。なお、試料となったSD001の各堆積物は、暗褐色化した微細木片がやや多く、土壤生成作用ないし風化を受けている。このことは遺跡がローム層上に分布し、比較的乾燥した環境下にあったことに起因すると考えられる。

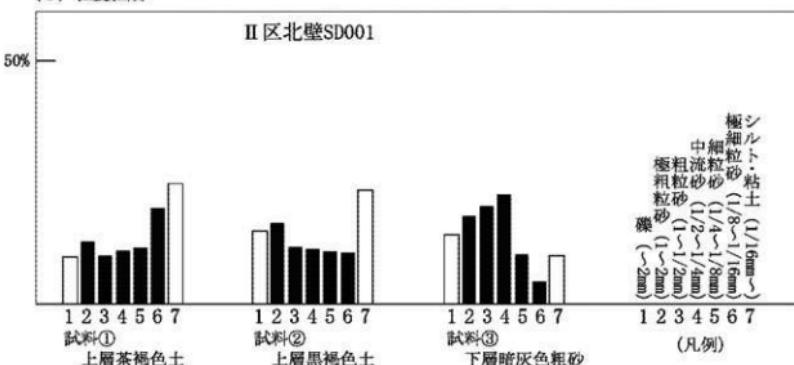
## 参考文献

- 中村純（1967）花粉分析。古今書院, p.82-102.  
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.  
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.  
中村純（1980）日本產花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.  
金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壤層分析の実証的研究。日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集, p.112-113.

表1 井尻B遺跡第36次発掘調査における花粉分析結果

学名	分類群 和名	SD001 II区北壁		
		①上層		③下層
		茶褐色土	黒褐色土	粗砂
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	5	2	
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1		
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae	クワ科-イラクサ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	6	12	1
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属	2		
Cruciferae	アブラナ科	6	3	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科		3	1
Astroideae	キク亜科			1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	23	13	1
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	單条溝胞子			3
Trilate type spore	三条溝胞子	5		
Arboreal pollen	樹木花粉	10	3	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			1
Nonarboreal pollen	草本花粉	38	31	5
Total pollen	花粉総数	48	34	6
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	2.9	2.1	2.7
		×10 <sup>2</sup>	×10 <sup>2</sup>	×10
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	3
Fern spore	シダ植物胞子	5	3	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石繭胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal・wood fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)

(1) 粒度組成



(2) 有機遺体の含有量

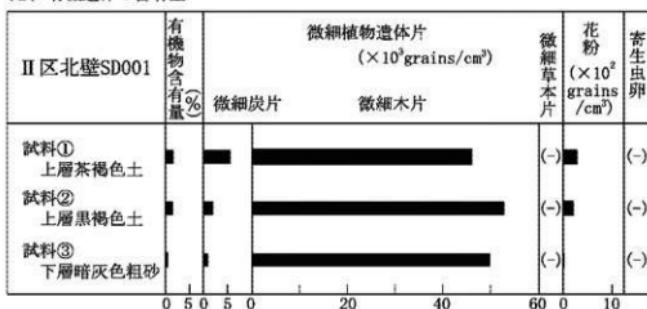


図1 井戸B遺跡第36次調査分析試料(堆積物)性状図

試料  $1\text{ cm}^3$  中の花粉密度

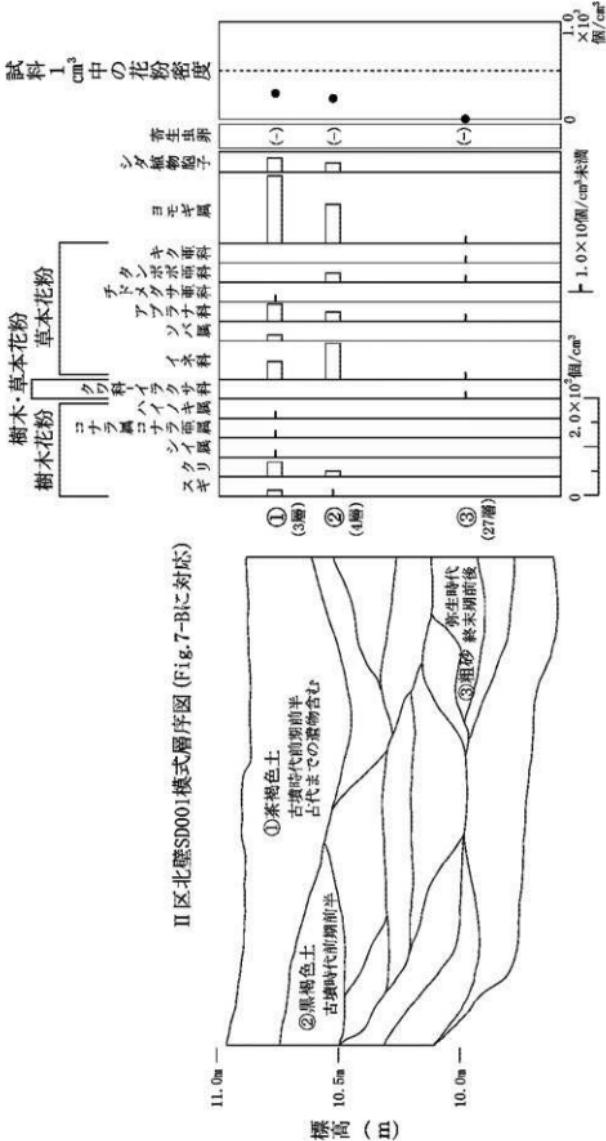
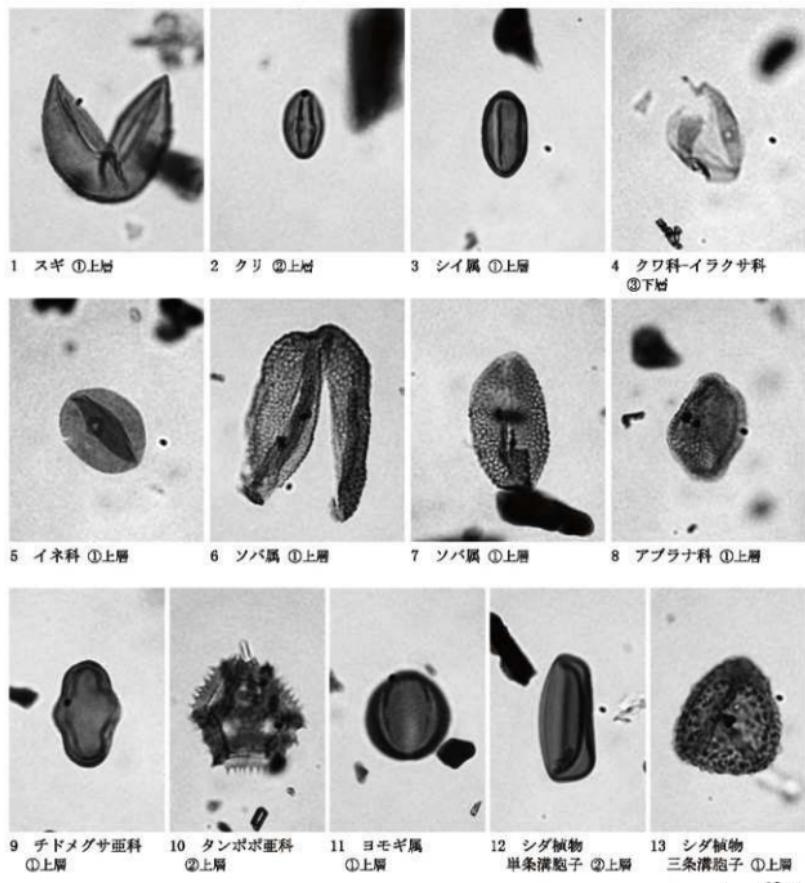


図2 井戸B遺跡第36次調査の花粉分析結果

井尻B遺跡第36次発掘調査の花粉・胞子

SD001 II区北壁



— 10  $\mu\text{m}$

## 4. まとめ

第36次調査は、遠藤北西の台地縁辺部に立地しており、弥生時代後期から古墳時代前期の大溝等を検出した。北側の17次調査F区と近接しており、一連をなす遺構がみつかっている。

17次F区SD2005は36次SD001と一連をなす大溝で、上層から韓国西部産とみられる陶質土器壺（古墳時代初頭から前期前半段階）が出土している。17次F区SD2018はSD2005の東側を切る遺構として報告されているが、本調査地点では切り合い等異なる解釈となった。SD2018は本報告のSD001cの延長とみられるが、SD001a～cの中では最も古い段階の掘削である可能性が高い。さらにSD2005（SD001a・b）溝掘り直しの土層解釈についても考えを異にする。17次F区SD2006は7世紀の溝として報告されているが、その延長上が36次調査地点ではみつかっていない。SD2006は直線溝ではなく、南に向かって東偏して、36次調査範囲の東側を通るものなのであろうか。36次SD002が同時期の溝とみられるが、調査区の北東部で東へ屈曲している。その延長は削平により消失しているのか、17次E区でも検出されていない。また、17次F区の報告書では遺構面のレベルが7m以下になっているが、原図では8.4～9.2m前後になっている。しかしこれも周辺の道路の標高からみて誤っており、さらに1.5m前後高く、実際の遺構面は36次より40～50cm前後低い程度とみられる。

SD001～SD2005は幅6m前後の大溝で長さ48m以上ある。台地の西縁辺を南から北に水が流れる水路と考えられる。直線的であるが、自然地形に沿ってやや東方へカーブしている。弥生後期の並列する小溝（SD001c、SD005）→弥生後期後半～終末期の大溝（SD001a、SD2005）→古墳時代初頭の再掘削（SD001b）→古墳時代前期前半には水路としての役目を終えて概ね埋没という変遷が考えられる。SD001覆土の花粉分析によれば、古墳時代前期前半の段階では乾燥を好む二次林種であるクリが生育し、畑作雜穀栽培（ソバ属、イネ科、アブラナ科植物）が行われていた可能性が指摘されている（第III-3章）。

同時期の「環濠集落」（西区今宿五郎江遺跡、西区野方中原遺跡、博多区雀居遺跡等）の環濠からは高密度で土器等が出土しているが、井戸B遺跡の大溝出土遺物は低密度で、略完形品の出土も多くない。出土遺物組成の差異は溝の機能の差異や廃棄の場としての意味づけの違いなどを示唆していると考えられる。SD001～SD2005は土層堆積から水路として機能しており、機能時は井戸並みの地下水もあって、枯れにくい水量を保っていたものと考えられる。その用途には生活用水、灌漑用水、舟運路等が考えられ、「環濠」よりも日常生活レベルの機能を第一とする遺構とみられる。

出土遺物は弥生時代前期から古代に及ぶが、弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器を主体とする。「外来系土器」は多くないが<sup>5</sup>、古墳時代初頭段階の近畿V様式系土器が一定量出土している。また、17次F区では古墳時代前期の陶質土器が出土している。当該期の建物址が多くみつかっている17次E区以南の土器組成とも異なっており、今後、集落内の集団関係を詳細に検討するうえでの手がかりになるかもしれない。今後の課題としたい。



1. I 区全景 (SD001 上層掘削段階 北から)



2. I 区 SD001 周辺 (南から 北壁の土器は R1 と R2)



1. I区 SD001 南壁土層断面



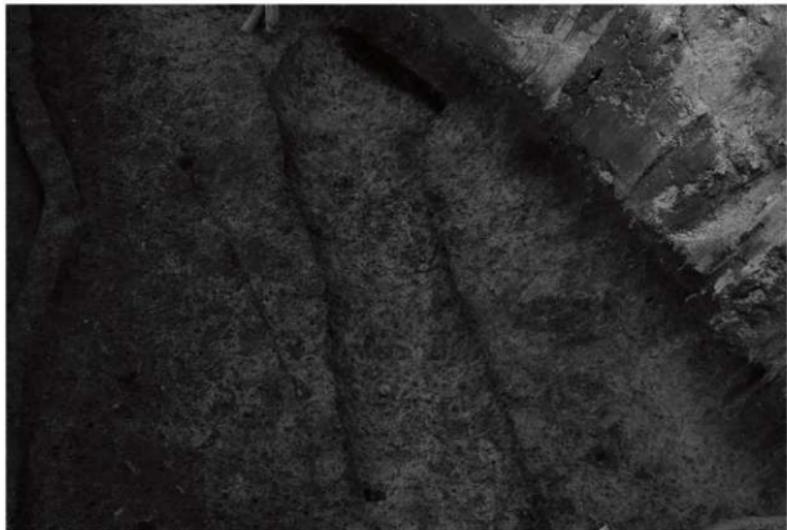
2. I区 SD005 (北から)



1. II区作業風景（南から）



2. II区全景（南から）



1. II区 SD002 (南から)



2. III区全景 (SD001 上層掘削段階 南から)



1. III区全景（北から）



2. III区 SD001（北から 土器は R4）



出土遺物 (番号は挿図番号に対応)

## 報告書抄録

ふりがな	いじりびーいせき 22							
書名	井尻B遺跡 22							
副書名	第36次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1217集							
編著者名	森本伴彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	X座標	Y座標	発掘期間 発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因	
いじりびーいせき 井尻B遺跡	ふくおかし 福岡県福岡市 みなみ・いこり 南区井尻1丁目	40130	0090	61856.183	-51982.7341	20110701 ~ 20110819	175	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井尻B遺跡	集落	弥生時代 ~ 古墳時代	溝、柱穴	弥生土器・土偶器・ 須恵器・土製品・ 石器				
契約	本調査地点は福岡平野の中央部、那珂川西岸の中位段丘上に立地する井尻B遺跡の北西縁辺に位置する。検出した遺構に遺物簡述のものではなく、溝群等を検出した。検出した溝は大小3条以上あり、互いに重複する。時期は弥生時代後期から古墳時代前期前半を中心とするものである。調査区の中央を南北方向に通る大溝は幅6m前後、遺構面からの深さ1.5m以上を測るが、北側の17次調査P区の大溝と一連のものであり、直線的に50m以上伸びることが明らかになった。大溝は台地の縁辺に配置された水量豊富な水路であり、生活用水、灌漑用水、舟運路としての機能を考えられる。遺物は大溝を中心にコンテナケース約20箱出土した。遺構規模に比べて、出土量が少なく、同時期の「環濠」等の遺物出土状況とは異なっている。弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器が主体で、近畿V様式系土器や筑前型庄内窯などが伴っている。弥生時代前~中期の土器、麦稭片や黒曜石石器も一定量混じっており、周辺集落域の消長を示唆する。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1217集

## 井尻B遺跡 22

－第36次調査の報告－

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社アートプロセス

福岡市南区高木2丁目8番7号